

グーちゃんまんねん パーでんねん

福島 義也

奨励者紹介〔ふくしま・よしや〕

日本キリスト教団河内長野みぎわ教会牧師

イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

(マルコによる福音書 10章17―22節)

ある日の礼拝で

子どもって、空気読めないですね。ほんまに、空気読めないです。それで大人が振り回されるということがあります。

僕が以前いた教会で、当時5歳の男の子と、2歳の女の子の兄妹がいました。その教会では礼拝堂の真ん中に通路があって、その左右に皆さんが座っておられるんですが、ある日の礼拝で、僕が説教している時に5歳のお兄ちゃんが真ん中の通路の一番後ろに突然立ったんです。そして、ニコニコしながら僕を見てるんです。説教を聴いてる大人とは明らかに違う視線を僕に向けてるんです。なんか嫌な予感がしながらも、それでも気にせず説教を続けていると、彼は僕に向かってまっすぐにトコトコ歩いてきます。よく見ると、手には画用紙のようなものを持っています。そして、一番前の僕の目の前までやってきて、その画用紙を僕に向かって見せてくるんです。でも、僕は説教中です。気にせずに話を続けていたのですが、なおさら彼は僕に必死になって画用紙を見せつけてきます。「これは、なんか言ってやらな、あかんのやろうな」と観念しまして、大人の皆さんに「ちょっと待ってくださいね」と断ってからその絵を見ました。そこには黒い丸いものが描かれてあって、なんなのかは分かりません。それでも、「上手に描けたな」と言うと、嬉しそうに「うん!」と頷くんですが、まだ戻ろうとはしません。どうも、具体的に褒めてほしいようなんです。でも、何を描いているのは分かりません。イチカバチカ「カブトムシか?」と聞くと、彼は「違う」と首を横に振りました。「はずしてしまったか・・・」と内心想いつつ、「クワガタか?」と聞くと、彼は「違う」と。「また違った」と思いつつ気を取り直して、「セミか?」と聞くと、「違う」と。「もう勘弁してくれよ」と心の中で思っていると、彼の方から「コガネムシ」と言ってくれました。「コガネムシは当たらへんわ」と思いつつ、「ああ、そうやな。コガネムシやな。上手に描けたな」と言うと、彼は満面の笑みを浮かべて嬉しそうに、ようやく戻って行ってくれました。

ホッとして説教の続きを語り始めた時、通路の一番後ろに今度は2歳の妹が立っているではありませんか。彼女はお兄ちゃんと僕とのやり取りを見ていて、私も行こう、と思ったのでしょう。まっすぐに僕の方へと向かってきます。しかも今度は何も持っていません。つまり何のプランもなく、僕の方へと向かってきているのです。そして一番前にたどり着いたものの、「どうしよう」という顔で僕を見上げています。「それはこっちのセリフじゃ」と内心想いつつ、彼女がどうするか見守っていると、おもむろに両手を広げて僕を見上げたのです。小さい子どもがそうした時、何のポーズか分かりますよね。「抱っこして」と言ってるんです。一瞬、どうしようかと思ったのですが、たまにはこれもいいんじゃないか、と思いまして、「よしよし、よく来たな」とその子を左手に抱っこして、そのまま説教を続けさせてもらいました。

幼い兄妹から教わったこと

思いがけないハプニングだったのですが、その礼拝が終わった後、信徒の皆さんが「先生、今日の礼拝、すごく温かい雰囲気でした」と口々に言ってくださったのです。それは他でもなく、あの空気を讀まなかった兄妹のおかげです。そんな二人の姿から、僕はとても大事なことを教えられたように思いました。礼拝という場所は、人間同士が向き合うところではありません。一人ひとりが神様と向き合う場所です。神様と向き合う時に、空気を讀む必要はないのです。ありのままの姿で向き合うことができればいいのです。大人はどうしても礼拝中でも空気を讀もうとしてしまいますが、子どもはそんなことを考えません。でも、神様の前では、そんな子どもの姿の方が正しいんじゃないか、と思わされたのです。

獲得すること、手離すこと

ちょっとだけ、聖書のお話をさせてください。

今日の聖書に出てきた「ある人」は、他の福音書に書かれてある同じ話では「青年」とか「議員」と書かれています。つまりこの人は、若くして議員をやっているような、優秀な人だったということです。彼自身、今日の箇所でも「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言っているように、自他共に認める優等生だったと思われます。今の時代でもそうですが、いろいろなものを獲得することが大事だとよく言われます。しっかり勉強して知識を獲得し、いい学校に行って学歴を獲得し、いい就職先を決めて社会的地位を獲得し、たくさんお金も獲得する。そうやっていろいろなものを獲得してそれを手離さないようにしっかりと守っていくことが幸せにつながると、昔から言われてきたことです。僕もそんなことを言われながら育ってきました。今日の聖書に出てくる人も、そう言われながら、そしてそのとおりに言うことを聞きながら大人になってきたのでしょう。そして彼は、最後にイエスの言葉を獲得したいと思ったのです。「あなたこそ、永遠の命を受け継ぐにふさわしい、神の国にふさわしい、素晴らしい人だ」というイエスからの太鼓判を獲得したかったのです。これまで頑張っているいろいろなものを獲得してきた自分だから、きっとイエスはそう言ってくれるに違いない、と彼は思っていたのかもしれません。

ところが、イエスが言われたのはその正反対でした。「あなたが獲得してきたものを、手離せ」と言われたのです。今まで一生懸命獲得して守ってきたものを手離すなんて、彼にはとてもできないことでした。それで、彼は悲しみながらそこを立ち去って行ってしまふのです。

けれども、イエスが言われた「手離せ」ということは、「捨ててしまえ」ということではないのです。自分で頑張って持っている必要はない、神様に委ねて預けておけば大丈夫、ということなのです。それはちょうど、子どもが「抱っこ」という時の姿に似ているのです。子どものその姿は、抱っこをしてくれる相手に自分のすべてを委ねている姿です。それと同じように、自分の持っているものを自分で守るのではなく、神様に預けておけば、必要な時に必要なものを神様がちゃんと渡してくださるのです。でも、神様が必要なものを渡そうとされた時に、僕たちの手が他のものを必死で握りしめていたら、つまり手がグーになっていたら、それを受け取ることができないのです。すべてを神様に預けて手を開いていたら、その手のひらに、神様は必要なものを置いてくださいます。

それだけではありません。先ほども言いましたが、神様に向かって空気を読むなんてことはなくていいのです。握っているその手を開いて、神様にすべてを預けて、そして抱っこしてほしい時にはいつでも「神様、抱っこして」と言っているのです。誰かに抱っこしてほしい、抱きしめてほしい、そう思うのは子どもだけではありません。大人になっても、しんどくて、苦しくて、悲しくて、誰か抱っこしてくれる人がいたらいいのに、と思うような時はいくつもあります。でも、この社会で生きていく中で、そういう顔をしていられない時が多いと思うのです。ほんまは泣きたいけど、苦しくて叫びたいけど、空気を読んで笑顔を作らないといけない、そんな時もあるでしょう。でも、神様に対してはそんなこと、思わなくていいんです。「泣きたいときは泣いたらいい、苦しいときは叫んだらいい、抱っこしてほしいときはいつでも私のところへおいで、あなたをしっかりと抱っこしてあげるからね」。そう一人ひとりに呼びかけてくださっている神様がおられる、ということを、どうか忘れずにいてほしいのです。

神様だったら、すべてを手離して預けていても大丈夫。空気を讀んだりせずにありのままの自分の気持ちをぶつけても大丈夫。そんな神様と向き合う時、私たちの手は、グーちゃいまんねん、パーでんねん。

2016年6月7日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録